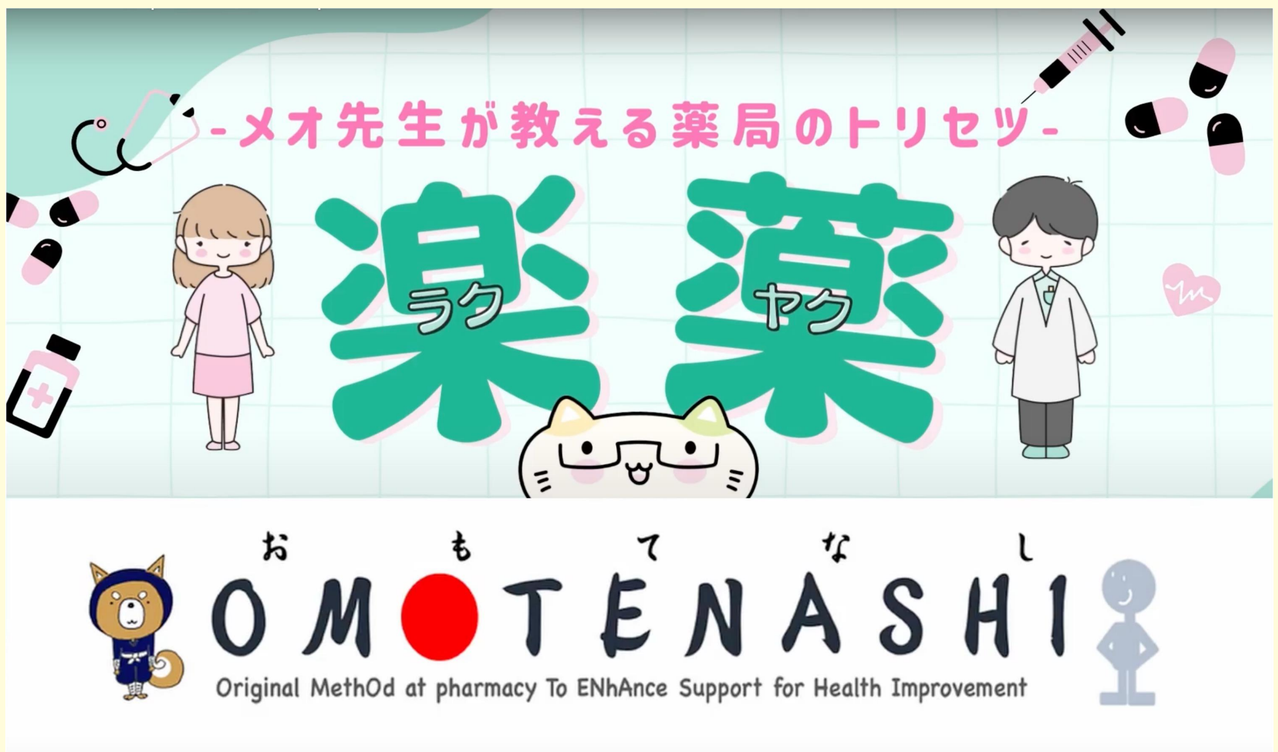
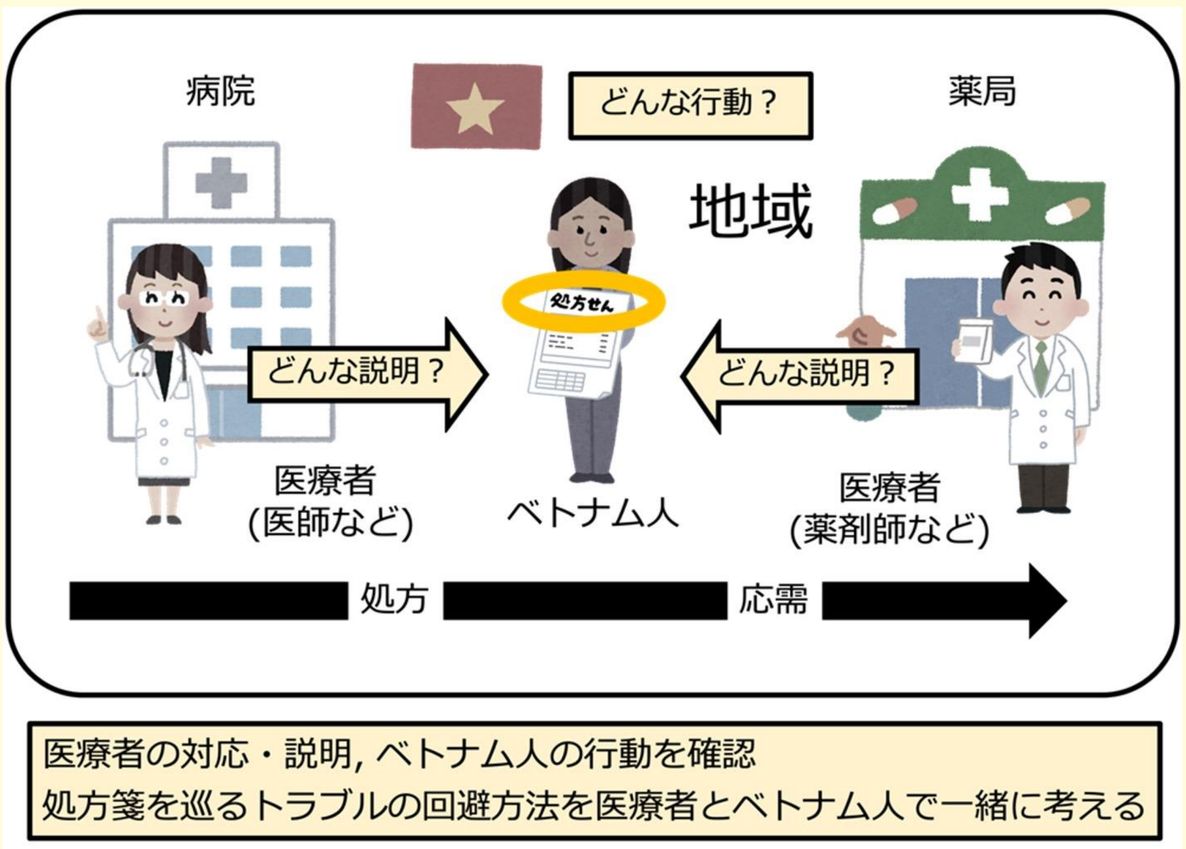
外国人が安心して暮らせる地域創生

～処方箋トラブル解消に向けたシミュレーション～

鈴木 渉太　和歌山県立医科大学 薬学部 社会・薬局薬学研究室 助教





背景と目的

地域で暮らす外国人と処方箋

社会の国際化に伴い、保険薬局（薬局）においても、言語・文化の違いに配慮した患者対応が求められている。病院等の医療機関では、外国人患者対応の可能な施設認証が広まり、受診する施設の検索は容易となったが、処方箋を応需する薬局は未対応であり、十分な備えのない薬局に院外処方箋が持ち込まれた場合等にはトラブルとなる。

過去の調査では、外国人は日本の医療機関を利用することに、また薬剤師は外国人患者と接することに、それぞれ不安を抱いていることが報告されている。我々はこの問題に対してこれまで、外国人が安心して暮らせる地域の創生を目標に据え、双方の不安を軽減するため、薬剤師が利用できる外国人患者向けの資材・アプリ開発（Original MethOdat pharmacy To ENhAnce Support forHealth Improvement: OMOTENASHI）Projectに取り組んできた。

この活動では、処方箋をテーマに医療者と外国人を募りワークショップを開催することで、外国人であっても安心して利用できる医療体制の整備に向けて共に考える場を設ける。

活動の方法

問題点の抽出とその解決に向けた資材開発

①事前準備：活動メンバーとベトナム人協力者（医師、 医療通訳者）で月1回Webミーティングを開催し、背景情報の整理と活動方針の検討、進捗管理を行った。

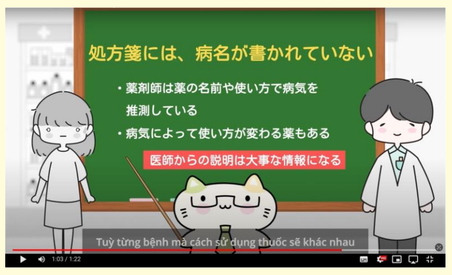
②中秋節イベント参加：9月上旬には、活動メンバーとベトナム人協力者で、在日ベトナム学生青年協会VYSA／KYOTOの主催する中秋節イベント@京都市左京東部いきいき市民活動センターに参加し、地域で暮らすベトナム人との交流を深めた。

③倫理申請：当初予定にはなかったが、本活動以外にもベトナム人と薬局に関する臨床研究を計画したため、合わせて倫理審査の申請・承認を得た。（課題名：日本における外国人の医療アクセスに関する研究-外国人と保険薬局を対象とした実態調査-／奈良県立医科大学 医の倫理審査委員会）

④インタビュー：10月下旬には、日本で暮らすベトナム人と日本人医療者とでワークショップを開き、インタビューを実施した。
そこでは、（1）医療機関で、医師が外国人患者に処方箋を出す場面、（2）薬局で、薬剤師が外国人の持ち込んだ処方箋に応需する場面、それぞれでどういった配慮が必要なのか意見を募った。医師2名、薬剤師2名、ベトナム人6名が参加した。インタビューは鈴木が担当し、ベトナム人協力者に通訳を依頼しながら日本語とベトナム語に加え、適宜英語で質問した。インタビューガイドは、「日本での体調管理について（病院受診、薬局利用、インターネット販売、ベトナムからの持ち込みなど）」「COVID-19による影響について（SNS利用、情報アクセス、オンライン診療など）」と、今回の目的である「処方箋の問題点について（病院の医師との関わり、薬局の薬剤師との関わり、説明のわかりやすさなど）」として、約2時間かけて実施した。

⑤分析：インタビューで得られた情報の文字起こしを行い、活動メンバーで協議の上、処方箋に関する医療機関及び薬局での問題点を抽出した。

⑥動画作成：問題点の解決に向けた対策を検討してシナリオを作成、在日ベトナム人向けテレビチャンネルHONTO TV（https://HONTOTV）の協力を得て、ベトナム語字幕付きの解説動画を制作した。



現状の成果・活動

5つの解説動画

日本で暮らす外国人の中でも、近年人口増加の著しいベトナム人の協力を得て、処方箋に関する問題点が抽出された。日本語や英語を母国語としないベトナム人が直面している、これらの問題点を解決するための資材として、字幕付きの解説動画5つが完成した。

今後の展望

外国人が安心して暮らせる地域創生に向けて

本活動を通じて、ベトナム人コミュニティと良い関係性を構築できた。開発した資材を役立てるためには、多くの在留外国人の目に留まり、広く見知ってもらえるSNS等への掲載、広報が必要となる。今後は、関連して取り組んでいる調査結果と合わせて成果を公開し、ベトナム人、ひいては日本で暮らすすべての外国人が安心して暮らせるように、日本人医療者の意識向上を目指す。
特に、薬局が地域において言語や文化によらず安心して訪れてもらえる中心的な場となるように活動を続けていく。